

## Ⅱ 指定中学校区における実践例

- 1 人間関係づくりの能力の育成を図る教育課程の小・中学校の円滑な接続による工夫改善
- 2 学習指導や生活指導の小・中学校の円滑な接続による工夫改善
- 3 その他の取組

# 1 人間関係づくりの能力の育成を図る教育課程の小・中学校の円滑な接続による工夫改善

スクールカウンセラーを講師とした小・中学校合同研修会の取組  
(岩内町立岩内第一中学校・  
岩内町立岩内東小学校)

## 効果的な取組とするためのポイント

小・中学校の教員が合同で、平成 25 年度の小学校第 6 学年と平成 26 年度の中学校第 1 学年の「Q-U」の結果を分析する演習や構成的グループエンカウンターに係る研修を実施し、児童生徒の人間関係づくりの必要性について共通理解を図っている。

## 取組の実際

### 小・中学校合同研修会の開催

(講師：北翔大学大学院非常勤講師、北海道公立学校スクールカウンセラー、岩内町立学校スクールカウンセラー)

#### 1 第 1 回小・中学校合同研修会（5 月）

##### 【研修テーマ】

「エンカウンターとブレインストーミングの実際」

##### 【研修内容】

- ① ピア・サポート活動や構成的グループエンカウンターに係る演習
  - ・ 開発的・予防的な取組の理解を深めるとともに、その重要性を確認した。
- ② 「Q-U」についての理解と活用の実際
  - ・ 具体的な事例を用いての分析結果に基づく指導方法の改善について協議を行った。



【研修会での演習の様子】

#### 2 第 2 回小・中学校合同研修会（11 月）

##### 【研修テーマ】

「『Q-U』による各校の結果の検証と今後の課題に向けて」

##### 【研修内容】

- ① ピア・サポート活動や構成的グループエンカウンターに係る演習
  - ・ 第 1 回目の研修後の各校での取組について協議を行うとともに、指導方法の改善に係る演習を行った。
- ② 「Q-U」の分析結果を踏まえた、児童生徒の交流
  - ・ 「Q-U」の結果をスクールカウンセラーの助言をもとに再分析をした。
  - ・ 具体的な事例を抽出して児童生徒理解に係る交流を行った。
  - ・ 中学校第 1 学年の結果と前年度の小学校第 6 学年の結果を比較し、その変容に重点を置きながら、中 1 ギャップの現状について理解を深めた。
  - ・ 6 月の「Q-U」の結果を受けて、小・中学校それぞれが取り組んでいる事例について交流し、指導方法の共通理解や新年度へのステップアップにつなげた。



【研修会での協議の様子】

## 成果 (○) と課題 (●)

- 「Q-U」の結果を分析する演習と人間関係づくりの演習を行ったことにより、参加者は課題意識をもって研修に臨むことができた。
- 同集団における中学校入学後の様子を交流したことにより、不登校対策は小学校の段階から計画的に行う必要があることを共有できた。
- 「ほっと」の実施・分析に関する研修を実施し、児童生徒のコミュニケーション能力について理解を深めていく必要がある。

# 1 人間関係づくりの能力の育成を図る教育課程の小中学校の円滑な接続による工夫改善

## 「ほっと」を活用して児童生徒理解の充実を図る取組

(白老町立白老中学校・白老町立社台小学校・白老小学校・緑丘小学校)

### 効果的な取組とするためのポイント

「ほっと」の結果を児童の人間関係形成能力に関する客観的なデータとして押さえ、全教職員が共有し、様々な視点から支援していくためのアセスメントの一つとして活用するとともに、複数回実施・分析して児童の変容や取組の成果を読み取り、教育相談等の指導・支援をより効果的に行えるよう、研修や教員間の交流の充実に努めている。また、引継資料の一つとして個人や集団理解に活用できるよう、小・中学校の連携を図っている。

## 取組の実際

### 1 『ほっと』の実施と分析（1回目）

児童生徒や学級の実態を客観的に把握し、指導に生かすことが重要なことから、全学年が学級始動期（大きな行事前で児童の心理的な振れ幅が少ない時期）に「ほっと」を実施した。

各学級の結果を、生徒指導部が中心となって研修で交流し、分析を行った。全教員が活用できるように研修会を設けることや、チーム力を生かすことで、幅広い分析と指導・支援策を考察することができた。

また、全児童生徒を全教職員で指導することの意識化や、学校としての体制づくりにも繋げることができた。

### 2 「ほっと」を活用した教育活動の改善

分析の結果による児童生徒への指導や支援策を2学期の学級経営に組み込み、困り感が読み取れた児童生徒に対しては2学期初めから教育相談等を行ったり、学級集団の課題を改善するための話し合い活動等を意図的に設定したりするなど、児童生徒の実態を踏まえた活動を取り入れた。また、構成的グループエンカウンター、クラスルームソーシャル・スキル、ピア・サポート、アサーショントレーニング等の実施に向け、教員の研修等を充実した。

### 3 「ほっと」の実施と分析（2回目）

11月中旬に実施する教育相談週間を前に、2回目の「ほっと」を実施し、分析や交流を進めた。

### <ほっとの分析と指導・支援策>

#### ○分析

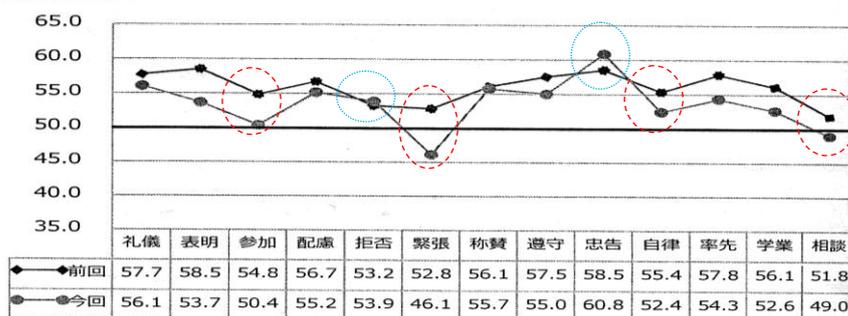
- ・得意なスキル、不得意なスキルとの開きが大きい。
- ・「緊張」が高く、自信をもてない児童が多い。

#### ○指導・支援策

- ・人間関係を円滑にするために、肯定的な声掛けをお互いに進んですることで、認め合うことができるように努めた。



1 3 要素偏差値



- ・前回（4～7月）と比べて、「忠告」と「拒否」が上回ったが、他は全体的に低調となった。
- ・特に「緊張」「参加」「自律」「相談」が大きく下がっており、引っ張ってくれる人に任せきりになっている傾向が見られる。

### 成果（○）と課題（●）

- 「ほっと」による児童生徒の実態と人間関係形成能力に関する客観的なデータにより、教育相談や教育活動の改善に生かすことができた。
- 「ほっと」の複数回実施による分析によって指導や支援の改善に繋げることができるよう、研修や交流の充実にに向けた時間の確保に努める必要がある。

# 1 人間関係づくりの能力の育成を図る教育課程の小・中学校の円滑な接続による工夫改善

新入生体験入学など、小・中学校が連携した取組

(標茶町立標茶中学校)

## 効果的な取組とするためのポイント

小学生にとって中学校での授業や生活は、期待とともに不安が大きいことから、小学校から中学校への円滑な接続を図ることを目的として、新入生体験入学を実施している。今年度からは、小学生が中学校教員による指導を受ける体験授業を実施している。

## 取組の実際

### 1 新入生体験入学

12月初旬、新年度入学予定の小学校第6学年児童を対象とした「新入生体験入学」を実施した。

#### (1) 学校生活等の説明

生徒会書記局の生徒が、自作のパワーポイントを活用し、学習や生活、学校行事などについて、小学校生活との共通点や相違点を明確にしながら説明を行った。また、昨年度開催した「標茶町子ども地区会議」において、小学生が中学校の挨拶運動の取組に関心をもったことから、標茶中学校で挨拶運動を実施している目的やスローガン、アンケート調査を活用した取組などについて紹介した。



【生徒会書記局による説明】

#### (2) 部活動及び少年団活動の紹介

部活動及び少年団の部長の生徒が、各種目の運動の特性や活動内容はもとより、部活動や少年団活動を通して、きまりを遵守することやよりよい人間関係を構築することの大切さについて説明した。

#### (3) 体験授業

児童に、中学校の雰囲気を実感してもらうことを目的として、昨年度まで実施していた授業参観を見直し、中学校教員による数学科、理科、外国語科の体験授業を行った。授業を受けた児童は「説明が分かりやすく、授業が楽しかった。」「中学校では、小学校で学習したことを使って進んでいくことが分かった。」などの感想を述べていた。



【数学科の体験授業の様子】

### 2 新入生保護者説明会

昨年度までは、2月に新入生保護者説明会を実施してきたが、中学校での学習や生活、部活動などについて早い段階で理解してもらい、家庭において児童と保護者が中学校生活について話し合ったり、入学の準備をしたりすることができるよう、今年度から体験入学と同じ12月初旬に実施した。

説明では、小・中学校の学習面や生活面での共通点や相違点を説明するとともに、いじめの認知数や不登校生徒が増加する中1ギャップ問題等についての情報提供を行い、学校と家庭が連携を密にして児童の些細な変化を見逃さず、情報交流することを確認した。

## 成果(○)と課題(●)

○ 小学生が中学校生活を実感できる工夫した取組を行ったことにより、児童は中学校での学習や部活動等への不安が消え、中学校生活に期待をもつようになった。また、特に中学校第1・2学年の生徒は、取組を通じて先輩や最高学年になるという意識を高めることができた。

● 毎年、児童生徒の実態が変わることから、小・中学校間の情報交流を積極的に行い、中学校生活に対する児童の悩み等を踏まえ、新入生体験入学及び新入生保護者説明会の内容を検討する必要がある。

# 1 人間関係づくりの能力の育成を図る教育課程の小・中学校の円滑な接続による工夫改善

「ほっと」や生活アンケートの実施、分析及び校内研修や学年会議等での活用  
(別海町立別海中央小学校・別海町立別海中央中学校)

## 効果的な取組とするためのポイント

小・中学校の子ども理解支援ツール「ほっと」の分析結果や各種生活に関するデータを共有し、児童生徒の現状と不登校傾向の把握やスムーズな引継のための資料等を積極的に活用している。  
また、小中合同の研修会を通して子ども理解支援ツール「ほっと」の活用や、人間関係づくりに関わる指導の改善に努めている。

## 取組の実際

### 1 子ども理解支援ツール「ほっと」や生活に関するデータの集約と活用

小学校に配置されている加配養護教諭が中心となり小中学校の「ほっと」のデータを集約し、特に学級開きや小・中学校間の引継の際に活用した。

また、加配養護教諭が児童生徒の小・中学校9年間の欠席や遅刻のデータを集約し、中学校で不登校状態にある生徒の過去の状況を検証するデータとして活用した。さらに、その検証を基に、不登校傾向を示しそうな児童生徒への早期対応を図った。

#### <早期対応の事例>

中学校第1学年の生徒が、6月から特に大きな理由もなく登校をしづり始めたため、小学校の養護教諭から当該生徒に関する情報提供を行い、中学校の学級担任が小学校時代の担任とも連携して保護者と対応した。また、スクールカウンセラーと協力して生徒の登校支援にあたった。

関係者が各種情報を共有することで、当該生徒に対して一定の見通しもって、共通した対応ができた。

当該生徒はしばらく別室登校を続けたが、段階的に教室に入るようになり、最終的に教室復帰することができた。

### 2 「ほっと」の活用、生徒指導に関する小中合同研修の実施

#### (1) 子ども理解支援ツール「ほっと」を活用した学級・教科経営に係る研修

北海道医療大学教授、富家直明氏による、子ども理解支援ツール「ほっと」を活用した学級・教科経営の見直しをテーマとした小中合同の研修を実施した。子ども理解支援ツール「ほっと」を活用して子どもたちの状況を把握し、小学校中学年からコミュニケーションスキルの育成に向けた取組を進めることで「中1ギャップ」の未然防止につながることを確認した。



【小・中・高合同研修】

#### (2) 小・中学校が連携して取り組む生徒指導に係る研修

生徒指導ネットワーク代表、吉田順氏による小中連携における生徒指導をテーマとした小中合同の研修を実施した。小・中学校が連携して9年間の系統性を明確にし、児童生徒の実態に応じた計画的な取組を行うことや小・中学校及び学年間の接続をスムーズにした学習指導を行うことが生徒指導の面でもプラスになることを確認した。

## 成果(○)と課題(●)

- 子ども理解支援ツール「ほっと」や様々なデータを共有し、共同で研修を実施することで、小・中学校の教員間で児童生徒の情報を積極的に交流し、有効に活用しようとする意識が高まった。
- 各種データの集約、整理を小学校の養護教諭に頼っている部分が多い。データの集約をシステム化し、継続して活用できる体制を整備する必要がある。

## 2 学習指導や生活指導の 小・中学校の円滑な接続によ る工夫改善

### 小・中学校間での家庭学習におけ る内容や方法についての連携の取 組

(岩内町立岩内第一中学校)

#### 効果的な取組とするためのポイント

小・中学校の教員が協力し、指導の系統性と発達の段階を踏まえ「教科別」、「学年別」、「授業と家庭学習」を観点とした、「家庭学習の手引」を作成し、活用を図っている。

#### 取組の実際

##### 小・中学校間での家庭学習に係る連携

本校では、これまで学校独自の「家庭学習の手引き」を作成していたが、「小学校とやり方が違う」という生徒の声や、学習習慣が身に付いていない実態を踏まえ、町の教育研究所に働きかけ、小・中学校の円滑な接続を意識した「家庭学習の手引き」を新たに冊子版で作成した。



#### ○ 教科別の取組のポイント

- ・国語科では、小学校第6学年と中学校第1学年の両学年に、予習として語句の意味調べを設定した。
- ・算数・数学科では、小学校においては四則演算等の計算問題の反復学習を中心とし、小学校高学年以降においては、思考力・判断力・表現力等の問題に取り組むよう働きかけた。

#### ○ 学年別の取組のポイント

- ・小学校第1学年から中学校第3学年までの取組の目安となる学習時間を設定した。
- ・特に、中学校では、短い時間の有効活用の仕方を示すなど、時間の使い方を生徒自身が工夫できるようにした。

#### ○ 授業と家庭学習をつなげるポイント

- ・小学校高学年からは、中学校進学後を見据えての予習方法のポイントを示した。
- ・小・中学校のいずれにおいても、授業内容との結び付きを意識した家庭学習の方法についてのポイントを示した。

#### 成果(○)と課題(●)

- 全国学力・学習状況調査では、「宿題を全くしない」と答える生徒が7.3ポイントから7.0ポイントになるなど、少しずつ成果は現れてきている。今後も、小学校と連携した家庭学習の取組を継続していくことで、改善が進むと考えられる。
- 小学校第6学年で学習した内容を中学校第1学年でも学習するよう設定することにより、生徒は安心して家庭学習に取り組むことができ、学習習慣の定着につながると考えられる。
- 参観日や学校だより等で、保護者や地域の方に、「家庭学習の手引き」を紹介していくことを通して、家庭と連携した家庭学習の取組を推進していく必要がある。

## 2 学習指導や生活指導の小・中学校の円滑な接続による工夫改善

### ワーキンググループを活用した小中連携の取組

(白老町立白老中学校  
白老町立社台小学校・白老小学校・緑丘小学校)

#### 効果的な取組とするためのポイント

中1ギャップへの不安を解消するためには、児童が抱えている中学校生活への不安の軽減に努め、小・中学校の円滑な連携を進めることが大切である。白老中学校区では小・中学校による授業交流や互いの校種への出前授業・乗り入れ授業等を実施し、円滑な連携を図っている。

### 取組の実際

#### 1 学力向上ワーキンググループにおける小中連携

校区内の小・中学校が相互に連携し、義務教育9年間におけるスムーズな学習の移行を図ることで、児童生徒の学習習慣及び学習規律の定着を促し、連続性のある豊かな学びの環境を整えることとした。

##### (1) 学習規律について

前年度作成した中学校区の学習規律のアウトラインを基に、小学校高学年と中学校との連続性の調整を図り、学習規律の重点とした項目の徹底や定着に向けて取り組んだ。

##### (2) 家庭学習の在り方について

昨年度、校区のワーキンググループにおいて、家庭学習の在り方のアウトラインとして作成した各校のパフレットや中学校区で統一して作成したリーフレット「家庭学習の充実のために」(※右図)を活用して、児童生徒の家庭学習の習慣化について取り組んだ。



#### 2 小・中学校による授業交流

授業交流を通して、小中連携の視点から授業改善を図ることを目的として実施した。

小学校と中学校の教員が相互に授業を参観し、参観後は授業に関する研究協議や児童生徒の学習・生活の様子について交流した。

#### 3 校種を越えた教員による出前授業・乗り入れ授業の実施

中1ギャップ問題の改善を目的として、中学校教員が小学校に赴いて授業(算数・体育・英語・理科・音楽で実施)を行うとともに、小学校教員が中学校の授業においてTTを行うなどの乗り入れ授業を行った。授業内容は、小・中学校の教員間で打合せを行い、児童生徒の実態に合わせた授業を実施した。



【出前授業の様子】

#### 成果(○)と課題(●)

- 学習規律の徹底や家庭学習の取組など、中学校区として一貫性のある指導の共通理解が進むとともに、授業交流や出前授業等の取組の充実により、児童生徒の実態や課題を教員相互で共有するなど、小・中学校の円滑な連携が図られている。
- 保護者、教員向けの家庭学習充実のためのパンフレット等を活用することにより、家庭学習に取り組む児童生徒が昨年度より各校平均10%以上増加している。
- 事業計画の推進に向けて、拠点校と連携校の実施日程の調整や組織的な取組をするための体制整備など、随時、見直し・改善を図る必要がある。

## 2 学習指導や生活指導の小・中学校の円滑な接続による工夫改善

小・中学校相互の授業参観や中学校教員による学習支援等、小・中学校が連携した取組

(標茶町立標茶中学校・

標茶町立標茶小学校)

### 効果的な取組とするためのポイント

児童が抱える中学校での学習・生活の不安を軽減し、小・中学校間の円滑な接続を図るため、小中連携委員会を中心に部会協議を行ったり、児童生徒の実態を把握するため、授業参観や学習支援を実施したり、学校間・学年間の連携した取組を進めている。

## 取組の実例

### 1 小中連携を推進する部会協議

本校と連携校の標茶小学校は、小中連携の取組として体験入学や引継ぎを行っていたが、今年度から、中1ギャップ未然防止に向けた取組の充実を図るため、各学校から委員を選出し、学習や生活の連携を一層推進させる「小中連携委員会」を発足し、教務、生徒指導、研修の部会に分かれて協議を行った。

#### 【教務部会】

- 小・中学校の学習規律を比較し、共通の取組を検討

#### 【生徒指導部会】

- 児童会・生徒会の取組の交流
- 年度末の引継ぎの在り方の検討

#### 【研修部会】

- 小・中学校で共通した授業スタイルの検討
- 教科ごとの授業実践交流及び各学校への情報提供

### 2 中学校教員による、小学校冬休み学習会の学習支援

中学校教員が小学校第6学年を対象とした学習会に参加し、学習支援を行うとともに、指導を通して児童の実態把握を行ったり、指導の系統性について理解を深め、授業改善に生かしたりした。また、児童は中学校教員からの教科の内容の専門的な指導を通して、既習内容の理解を深めた。

### 3 授業参観交流

小・中学校の教員が、それぞれの参観日に授業参観を行った。今年度は、小中連携委員会の部会報告を基に、児童生徒の実態把握の他、「学習規律」や「学習過程」も視点に加えて参観した。参観した教員は、各学校において、視点に基づく交流を行い、小中連携の具体策を協議した。



【作成した便りを、小中両校で回覧】



【冬休み学習会で学習支援を行う中学校教員】

### 成果(○)と課題(●)

- 小中連携委員会を中心とした小中連携の取組を推進したことにより、各学校の児童生徒の実態や学習指導の共通点や相違点について共通理解を図り、連携の取組を進めることができた。
- 小・中学校間の円滑な接続を促進するために、学習規律や学習過程等の共通指導項目を決定して迅速に取組を実施し、成果や課題の定期的な検証と結果についての情報交流をする必要がある。

## 2 学習指導や生活指導の 小・中学校の円滑な接続による 工夫改善

小・中学校相互の授業参観や出前授業等、  
小・中学校が連携した指導方法、指導体制  
の充実  
(別海町立別海中央小学校・  
別海町立別海中央中学校)

### 効果的な取組とするためのポイント

年間を通して、毎週中学校教員による小学校への乗り入れ授業を実施し、教科指導を通して継続的な児童理解に努めている。また、担当教員間の打ち合わせの定期的な実施や高等学校も含めた合同研修の実施により教員の指導力向上に努めている。

## 取組の実際

### 1 数学科・英語科教員による小学校乗り入れ授業の年間を通じた実施

中学校の数学科の担当教員3名が、小学校第4学年から第6学年の算数の授業に週3時間、英語科の担当教員2名が、小学校第6学年の外国語活動の授業に週2時間程度、ティーム・ティーチングのT2として指導に当たっており、次のような成果が上がっている。



#### (1) 児童生徒理解

小学校の授業に参加した教員が児童の様子を日常的に観察しており、中学校の教員に情報提供することで、教員全体で児童の実態についての共通理解が図られている。また、乗り入れ授業を継続的に行うことにより、児童一人一人の課題を中学校教員が詳細に把握することができ、中学校入学後に学習面及び生活面においてきめ細かな指導を行うことができるようになった。



【小学校での乗り入れ授業】

#### (2) 教科指導

中学校教員が小学校での指導を行うことで小学校の教育課程や学習内容の定着状況を把握し、中学校入学後の生徒の実態に合った学習指導に役立てている。また、小学校教員と中学校教員がともに授業検討や授業評価を行うことで授業改善を図ることができるようになった。

### 2 打合わせの定例化

月1回の授業打合わせの時間を設定したほか、教科によっては週1回の短時間ミーティングを継続して行った。また、それに合わせて、教務や生徒指導等の各分掌の打合わせを行うことにより、児童生徒の様子や教育活動のねらい等について情報交流をすることができ、小中の繋がりを意識した取組が行われるようになった。

### 3 小・中学校、高等学校の合同研修の実施

小中高の連携をテーマとした研修を実施し、特別支援教育や学習規律、学力向上、生徒指導について連携した取組を行うための協議を行った。

### 成果(○)と課題(●)

- 小・中学校、高等学校での児童生徒の状況やそれぞれの校種における学習指導法についての共通理解が進むことで、児童生徒を長期的な視野のもとで育てる環境が整い、学力向上の面でも一定の成果が表れている。
- 行事等が重なる時期は、打合わせの時間確保が難しいため、それぞれの担当同士が緊密に連絡を取り合い、臨機応変に機会を設定するような体制づくりが必要である。